

令和8年度 第1回教育課程編成委員会 要旨

日時：令和8年6月24日（水）13：30～16：00

場所：国際園芸アカデミー 研修室A

【あいさつ（井戸学長）】

本日は、ご多忙のところ教育課程編成委員会にご出席賜り、御礼申し上げます。

また、平素より本校の教育活動に対し格別のご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

本年4月より学長に就任した。今後ともよろしくお願い申し上げます。

本年度は新たに22名の学生を迎え、現在、技能検定受験に向けた訓練を進めている。加えて、8月1日・2日に富山県で開催される若年者ものづくり競技大会では、本校1年生が造園職種の県代表として出場する。

また、各団体のご協力により、展示制作やボランティア活動などの学外活動に参加し、実践的な学習機会をいただいている。

4月23日には企業説明会を開催し、18社の参加のもと、学生にとって業界理解を深める貴重な機会となった。2年生は就職活動の時期を迎えており、一部に内定者も見られるなど、就職に対する意識の向上がうかがえる。また、1年生についても企業や業界への理解を深める機会となり進路意識の醸成が図られた。

9月にはシンガポールで海外視察研修を予定しており、国際感覚を身につけることを期待している。

本委員会は、業界のご意見を教育課程の編成に反映することを目的として年2回開催している。委員には2年間の任期においてご協力を賜るとともに、忌憚のないご意見をお願い申し上げます。

【委員会の成立について（田村副学長）】

委員11名中9名の出席をいただいております。過半数の出席であるため、教育課程編成委員会規程第8条第1項の規定により、本日の教育課程編成委員会が成立。

【報告事項 令和7年度第2回教育課程編成委員会の委員の意見に対する取り組み状況について】

（資料により説明）

- ・委員からの意見なし。

【検討事項（1）：令和7年度後期カリキュラムの実施状況について】

（資料2～4により説明）

工藤委員

- ・インターンシップについて、受入企業側からの評価については、何らかの形で把握されているか。また、その結果について概要など教えてほしい。

事務局

- ・インターンシップにつきましては、派遣先企業を対象に、学生の姿勢や態度等についてアンケートを実施し、評価をいただいている。
- 全体としては、学生が真面目に取り組んでいるとの評価を多くいただいている。
- また、企業が必要としている人材や知識・資格、インターンシップの時期・方法など前向きなご意見を多数いただいております、具体的な内容につきましては、後ほど、説明したい。

大西委員

- ・学生による授業アンケートは記名式か、無記名式か。
- ・仮に無記名であっても、提出状況などから個人が特定されるのではないかと。匿名性が十分に担保されることで、より率直な意見が得られるのではないかと考える。
- ・学生としては、否定的な評価を記入すると成績に影響するのではないかと懸念から、本音を言いにくい可能性もあり、例えば Web 化など、より匿名性の高い方法の導入を検討いただきたい。

事務局

- ・昨年度から Logo フォームを活用してアンケートを実施。個々の学生に、ID を付与しており事務局側では回答状況の把握が可能となっている。
- ・一方で、教員へのフィードバックに際しては、個人が特定されないよう匿名化処理を行ったうえで共有しており、その点については事前に学生にも説明したうえで実施している。

井戸学長

- ・授業の質の向上を図る観点から、学生によるアンケートは引き続き実施していくことが重要であると考えます。
- ・また、ご指摘いただいた点を踏まえ、否定的な意見も含めて率直に回答しやすい環境づくりに配慮しながら、今後の改善に取り組んでまいります。

【検討事項（２）：各専攻コース等の授業の実施状況】

（資料 5-①～5-④により説明）

日比委員

- ・造園分野の「造園設計演習」は、令和 7 年度から新たに取り組まれた授業とのことだが、設計にあたり、家族構成などの条件はどの程度設定されているのか。

新井委員

- ・設計にあたっては、一定の条件を設定。例えば、昨年度は家族 4 人構成とし、保護者の年齢層や子どもが小学生程度であることなどを前提条件とした。
- ・また、駐車場については 2 台分を必須とし、可能であればさらに 1 台分を設けるといった具体的な条件も設定。
- ・一方で、家族の趣味や生活スタイルなどについては、学生が自ら設定する形とし、設計の自由度も持たせている。

日比委員

- ・資料の模型を見ると、建物やデッキ部分が共通のように見受けられる。これは固定されたものか。

新井委員

- ・当該模型は、設計作品そのものではなく、模型というもののスケール感を把握するため、練習として同一のデザインのものを全員で作成したときのもの。

日比委員

- ・起業・経営シミュレーションに関し、当社では、都市公園の指定管理も行っており、イベントとしてチームビルディング研修を実施。企業の新入社員研修などでも導入され、参加者同士のコミュニケーションが活性化し、短時間で関係性が深まる効果があったようだ。
- ・教育においても有効であり、社会に出てからも役立つ内容であり、継続して実施するとよい。

佐藤准教授

- ・ご指摘のとおり、チームビルディングは企業研修等でも広く活用されている内容であり、その有効性を踏まえて授業に取り入れている。今後も継続して実施したいと考えている。

國井委員

- ・ビオラの新品種育成について、卒業研究として取り組む場合、1 年次から開始するのか。

前田委員

- ・1 年次後期の段階から開始し、2 年次まで継続する形で実施している。
- ・具体的には、1 年次後期の秋頃に交配を行い、採種したものを 2 年次に育成・観察・選抜する。
- ・新品種の開発は短期間で完結するものではなく、複数年を要するため、研究は学年間で引き継ぎながら進めている。完成までには 6～7 年程度を要する場合もある。
- ・また、選抜にあたっては、生産者からの意見や課題を踏まえた改良のほか、見た目の美しさなどの観点も含め、多角的に評価を行いながら育成している。

【意見交換：業界に必要なスキルと求める教育内容について】

(資料6により説明)

宇野委員

- ・近年、花き業界全体として、ナフサ価格の影響などもあり、非常に厳しい状況にある。いくら良いものを生産しても売れない時代になってきており、嗜好品に対する支出が控えられる傾向も強く、市場環境は厳しくなっている。
- ・これまでヒートポンプ、ミストなどの導入が推奨されてきたが、ランニングコストが大きな負担となっている。農業は資材費やエネルギーコストが上昇する一方で、販売価格が下がる傾向にあり、経営的に非常に厳しい状況にある。
- ・実際に、生産者の中には廃業する者も増えており、肥料価格も高騰する中、このままの価格では採算が合わないという問題も発生している。
- ・現在は、バイオスティミュラント資材の活用や農薬や電力使用を抑えた省エネルギー型の生産を模索している。
- ・今春、県が笠松競馬で企業とのコラボを行った結果、新たに市場を創出できたことは、今年一番の成果だった。
- ・新しい売り先や売り方について卸売会社や小売は考えておらず、これからは需要を自ら創出する視点をもつところしか相手にしないつもりである。
- ・新品種については、消費者は予想外のものや新しい価値を求める傾向があり、こうした商品は SNS などを活用することで広く認知され、販売につながる可能性があると考えている。
- ・また、生産者の中には、6次産業化に取り組み、生産から販売までを一体で考え、付加価値を高めることで活路を見出そうとしている人もいる。
- ・教育においては、簿記や損益分岐点など、経営感覚を身につけることが重要であり、経営の視点を持った人材育成が求められている。また、厳しい現状への理解も含めた実践的な教育が必要である。
- ・現在は人材確保も難しく、賃金上昇の影響もあり、雇用環境は厳しくなっている一方で、外国人材はコミュニケーション能力が高く、前向きに働く姿勢が印象的であった。仕事に対しては、お金だけでなく『好きで取り組む姿勢』も重要であり、そのような意識が結果につながると感じている。

大西委員

- ・近年、花き業界は非常に厳しい状況にあり、農業も一つのビジネスとして捉えていく必要があると強く感じている。
- ・生産においては、生産することばかりではなく、1鉢をいくらで生産し、いくら利益が出ているのかを把握していなければ経営はできない。こうした収支構造を正しく理解できる人材でなければ、将来的に独立して経営を行うことは非常に難しい。
- ・自身の経験としても、農業高校や大学、さらには海外で栽培技術を中心に学んできたが、実際に現場に入ってから経営面の知識不足に苦慮した経験がある。

- ・また、近年は国際情勢の影響により資材価格が高騰しており、経営環境は一層厳しくなっている。状況が短期間で大きく変化する中で、収益を正しく把握し判断できる力の重要性はますます高まっている。
- ・このような背景から、特に生産分野で独立を目指す学生に対しては、経営に関する知識、特にコスト管理や収支の把握能力を身につけさせる教育が必要であると考えます。
- ・今回、シミュレーションを含めた経営的な科目が導入されていることは、非常に有意義であり評価できるものである。

国井委員

- ・今後は「売り方」の視点が一層重要になると考える。
- ・近年は、SNSを通じて情報収集や購買行動が行われる時代となっており、単に情報を発信するだけではなく、「いかに購入につなげるか」という視点が求められる。具体的には、消費者の関心を引く発信内容の工夫や、どのような言葉で伝えるかといった点も重要であり、そうした表現力や発信力も必要なスキルであると感じている。良いものを作るだけでは十分ではなく、その価値を適切に伝え、興味を持ってもらう力が求められる。
- ・SNSの活用については、効果的に活用している生産者も多く見られ、今後の販売戦略において欠かせない要素である。
- ・花屋も花を売るだけの従来の形態から、例えば、カフェを併設するなど、他のサービスと組み合わせることで、結果として花の購買につなげるといった取り組みが今後、経営を続けていくうえで重要になると考えられる。

日比委員

- ・同じ植物を扱う業界として、根本的な部分には共通点が多いと認識している。
- ・一方で、造園分野は樹木を主体とし、公園や緑地、ランドスケープ、個人住宅の庭園、街路樹などを対象とする点に特徴があり、業務領域としては花き生産とは異なる側面を有している。ただし、花を個人の庭や緑地への植栽に活用するなど、両分野が重なる部分も一定程度存在している。
- ・また、造園業界はこれまで公共事業と民間事業の両輪で発展してきた経緯があるが、近年は大きな転換期を迎えている。これまで国の施策により緑地の整備が進められてきたが、一定の整備水準が達成された現在、新設から維持管理へと重点が移行している。
- ・一方で民間分野においては、住宅着工件数の減少が見られるものの、老朽化した企業施設の再整備や再開発の需要が高まっており、特に、工場や事務所の再編、物流拠点の整備などに伴い、企業向けの緑地整備の機会は今後も一定程度見込まれる。
- ・また、近年は企業における環境配慮やイメージ向上の観点から、ESG投資の重要性が高まっており、緑地の整備においても付加価値の提供が求められている。グリーンインフラや環境対策といった視点を取り入れた提案やアイデアを出し、他社との差別化を図ることが、今後の経営において重要になると考えられる。
- ・園芸アカデミーには、このような提案やアイデアを出せる人材を育成してほしい。

- ・そのためには、まず基礎となる造園の専門的知識・技術を確実に身につけることが重要であり、そのうえで、花き生産や流通、デザインなど、造園以外の知識・知見も身につくような教育をしてもらいたい。
- ・特定分野にとどまらず、幅広い領域に関心を持ち、自ら課題を見出し、「どのようにすれば価値を生み出せるか」を考えられる人材の育成が重要である。そうした視点こそが、今後の業界において生き残るための鍵になると考えられる。

古田委員

- ・ホームセンターでは、園芸はどの店舗でも重要な売場の一つだが、競合店舗との価格比較が常に意識される環境である。
- ・インターンシップに来ていただいた学生から、「設定価格に対してどのように商品内容を構成するか」といった視点で資材や仕様を検討した経験は、勉強になったとの発言があり、うれしく思った。
- ・HC バローでは、「一番いいものを一番よい状態で提供する」を目指している。一方で、経営面では「仕入れた商品をいかに全て販売するか」がテーマであり、新鮮な商品が入荷しているのに売れ残った商品から販売するなど、良い状態の商品を販売できていないこともある。
- ・アカデミー出身の社員は、植物の状態や品質の見極めを理解しており、現在では、店舗の園芸部門のチーフとして、売り場全体の運営のほか、単に商品を販売するだけでなく、アレンジメントや提案型の販売など、その分野で大いに活躍してもらっている。
- ・今後、求められる人材としては、基礎的な専門知識のほか、現場で多様なスタッフと協働するためのコミュニケーション能力、そして「花が好きである」という姿勢であると思っている。

工藤委員

- ・今年度から、岐阜県においては「岐阜農業活性化基本計画」が新たにスタート。
- ・本計画は5年ごとに見直しを行う農業振興の基本指針。今回の計画では、「アグリパーク構想」を柱に据え、既存の担い手の経営力向上に加え、新たに農業に関わる人材の裾野を広げることを重視している。
- ・一方で、資材や燃油価格の高騰などにより、生産現場では依然として厳しい経営環境が続いている。このため、県としても各種支援策を講じているが、担い手の確保や施設の円滑な継承など、中長期的な課題への対応も重要となっている。
- ・後継者不在の農業者が存在する中で、既存の施設や経営資源を次世代の担い手へ円滑に引き継ぐ仕組みの構築は極めて重要であり、特に、アカデミーにおいて学んだ人材が、こうした居抜き型継承の受け手として地域に参入することができればと期待している。
- ・また、2年間の教育のみで直ちに独立することは容易ではなく、一定の実務経験を経て現場へ参入するような仕組みづくりも必要で、この点においても、アカデミーの役割は非常に重要であると考えている。

- ・教育内容については、自身の経験も踏まえ、特に「植物の名前及び学名を覚えること」の重要性を強く挙げたい。
- ・1年生のころから、できるだけ多くの植物を知り、その名前を覚える経験は、その後の専門分野において大きな強みとなると感じているので、植物の名称及び学名を体系的に学び、確実に身につける機会を積極的に設けることが重要であると考えます。

前田委員

- ・本校に入学してくる学生の中には、将来的に花き生産に携わりたいという志向を持つ者も多いが、卒業後すぐに独立して経営を開始することは、技術面・資金面の双方から見ても容易ではない。そのため、多くの学生は一度、生産法人等へ就職し、実務経験を積みながら技能や知識を高めていく進路を選択している。
- ・しかしながら、県内からの求人が少ないことから、就職先が県外となり人材が流出してしまうケースも見られ、地域における人材定着という観点では課題を感じている。この点については、教育機関としてもジレンマを抱えながら対応している状況である。
- ・教育内容に関しては、本校でも研修や外部連携を通じて様々な事例収集に努めている。例えば、エディブルフラワーの活用や、SNSを通じて生産者自身が情報発信を行い販路拡大している事例など、学生には多様な可能性を示しつつ現実的な視点も併せて伝えるようにしている。
- ・また、異業種との連携の重要性についても認識している。例えば、陶器業界において植物栽培キットとして商品化された事例や、サボテンを題材としたカプセル商品が販売されるなど、園芸分野以外の視点から新たな市場が創出されている。
- ・さらに、流通現場の視察等を通じて、ホームセンター等の小売業において、本校学生が学んできた生産・造園・装飾の知識を総合的に活かすことができる職場であり、今後の有力な進路の一つであると捉えている。

古田委員

- ・昨年度採用した造園コースの学生については、初期配属としてはあえて当該部門には配属せず、まずは種苗に関する売場を担当させた。
- ・これは、園芸に関わる基礎的な知識や商品理解を幅広く身につけることが重要であると考えたためである。また、将来的に家業を継ぐ意向を持つ人材であったことから、基礎から体系的に学ぶ経験が有益であると判断した。
- ・現在、アカデミー出身者については、初年度～2年程度は基礎的な売場業務を中心に経験を積み、その後、複数店舗を順次経験させることで、業務の幅を広げる育成方針をとっている。
- ・現在、複数名の社員がハウス栽培に従事している。外部の既存施設の活用、他地域のホームセンターとの連携により専門人材の指導を受けている。
- ・一方で、現状の課題としては、園芸分野全体として、野菜苗などの生産・販売に注力する傾向が強く、今後の店舗改装等を機に、花き分野の充実を図る予定。

新井委員

- ・学生が複数の科目を履修する中で、それぞれの学びが十分に関連付けられず、個別の知識として捉えられてしまう傾向が見られる点に課題を感じている。
- ・例えば、1年次に履修する製図や測量といった基礎科目が、2年次の設計演習や実際の庭づくりへと十分に結びついていない場面がある。科目ごとに学習内容が分断され、「別のもの」として理解されてしまう傾向があり、これらをどのように意識付けし、実践へとつなげていくかが課題。
- ・また、就職後の現場においては、若手のうちは指示を受けて作業を行う場面が多いと思われるが、学生に対して、現場でどのように自己の発想や提案を活かしていくことができるのか、具体的に示していくためにも、造園業界における実際のアイデア発揮の場面についてご教示いただきたい。

日比委員

- ・カリキュラムにおいて、製図、CAD、設計、測量などが必ずしも完全に結びつかない点については、それぞれの科目に固有の役割があるため、無理に一体化させる必要はないと考える。
- ・実際の現場では、それぞれの基礎的な技能が必要な場面があり、測量、製図、設計といった要素は、実務の中で段階的に結びついていくものである。したがって、まずはそれぞれの基礎を確実に身につけることが重要である。
- ・また、現在の設計業務においてはCADの活用が主流となっているが、本来は手描きによるもので、顧客との打合せの場面では、その場で顧客の要望を聞きながら簡易なスケッチを描き、提案できる能力は、顧客の理解と信頼を得るうえで非常に有効になる。
- ・こうしたプロセスにおいては、単なる設計技術だけでなく、顧客との対話の中で空間をイメージし、それを形として表現する能力が重要となる。
- ・また、空間提案においては、植栽の種類や配置、ボリューム感、色彩などを総合的に考え、顧客に対して価値を具体的に示す力が求められる。そのためには、知識に基づきながら、自分なりの視点で「どのようにすればより良くなるか」を考え、提案できる力が重要であると考えている。

佐藤准教授

- ・花き業界においては、新たなマーケットの開拓が重要であるとの議論があった。
- ・自身の経験として、家族が施設に入所しているが、その環境は非常に殺風景であり、要望もあり、週に1回花を購入して持参するようになった。1本あたり数百円程度であっても、継続的に購入することで、月単位では相応の支出となり、年間では比較的大きな金額になる。
- ・総務省の家計調査の平均的な花き消費額と比較しても、それを上回る支出になっている。このことから、従来想定されていなかった用途やニーズの中に、新たな市場が存在して

いる可能性があると考えられる。

- ・また、当初は価格に対して割高感もあったが、利用を継続する中で、花によってもたらされる心理的価値や満足感を実感するようになり、結果としてその支出に対する認識も変化した。

宇野委員

- ・自身の経験として、アパレル分野に携わっていた経歴があるが、ものづくりにおいては「作る力」を持つ人材が最も強いと感じている。
- ・花き業界においても、従来はブライダル需要などが市場を支えていたが、近年は社会経済状況の変化により、その需要が大きく減少している。こうした中で、新たな需要先として福祉施設や高齢者施設などが考えられるが、現在、衛生面や制度上の制約により植物の持ち込みが制限されえている。
- ・しかしながら、こうした分野には依然として潜在的な需要が存在しており、一定の基準を満たした商品開発や流通の仕組みを構築できれば、大きな市場として成立する可能性を感じており、市場が中心となり、このような課題解決に向けた取り組みを進めるべきであると考えている。
- ・また、業界全体として新たな発想や挑戦が不足している点も課題であり、小さな工夫やアイデアの積み重ねによって市場を切り拓く姿勢が必要である。自身としても、これまでの経験を踏まえ、異なる視点からの取り組みを続けてきた。
- ・人材育成に関しては、意欲のある若者に対しては積極的に指導していきたいと考えているが、そのためには単なる関心だけでなく、継続して努力する姿勢が求められる。
- ・現在は、花束だけでなく花かごなど多様な商品展開も再び試みており、用途の広がりに応じた商品開発が重要であると感じている。加えて、小売現場との連携を通じて、専門的な知識を持った人材の必要性も改めて認識。

前田委員

- ・花き生産の分野に関しては、強い意志と関心を持って生産分野へと進路を選択する学生が存在している。
- ・実際に、生産法人と流通業の雇用条件を比較しながら学生に進路選択をさせるケースもあるが、それでもなお「花を生産する仕事に就きたい」という明確な意思をもって生産分野を志望する学生も見受けられる。このような学生は、ある程度の覚悟をもって進路を選択していると考えられる。

大西委員

- ・近年の岐阜県における花き生産の状況として、特に鉢物分野においては、いわゆるガーデニングブーム期の流れを受けて、大量生産・大量販売を前提とした生産法人が多く存在している。しかしながら、現在の市場環境は大きく変化しており、従来型の大量生産モデルでは経営が厳しくなっている状況である。

- ・特に、生産法人においては雇用を維持する必要があることから、一定規模以上の生産を継続しなければならず、その負担が経営を圧迫している現状。
- ・一方で、ゼロからの起業や小規模経営という視点に立てば、空き施設や遊休ハウス等を活用することで、新たに参入しやすい環境を整備することも重要で、こうした資源を有効活用することにより、若い世代が挑戦しやすい環境が整うことが期待される。
- ・実際に、若い世代で、小規模であっても独自のビジネスモデルを構築し成果を上げている事例も見られる。例えば、多肉植物を扱い、自らのキャパシティに合わせた生産をして、効率的に販売を行うことで成功しているケースがある。

宇野委員

- ・花き生産に限らず、造園や庭づくり、家庭向け植栽などと組み合わせることで、事業の幅を広げることも可能であり、発想次第で多様な展開が見込まれる分野である。
- ・一方で、現状としては、実際に行動に移す人材が少ないことも課題である。意欲を示すだけでなく、継続して取り組む姿勢が不可欠。

工藤委員

- ・働き方の多様化に伴い、進路の選択肢も広がっている一方で、情報が整理できていないことにより、学生が適切な判断を行うことが難しくなっている側面もある。そのため、教育機関においては、業界情報や進路に関する情報を適切に整理し、分かりやすく提供していくことも重要な役割になる。

【閉会（田村副学長）】

委員の皆様に変え貴重なご意見をいただき、感謝申し上げます。いただいたご意見をもとに、今後の授業やカリキュラム編成に生かして参りたい。

以上で、令和8年度第1回教育課程編成委員会を閉会する。